

人と環境を考える

ユニバーサルデザイン

大熊 章夫

ユニバーサルデザインという言葉、聞かれたことはありますでしょうか。障害・能力により差異の生じない製品・施設的设计・デザインのことをいうのですが、ひらたく言えば「誰もが使える」工夫をしたものを指します。



写真1 ユニバーサルデザインのハサミ（バネ・ロック機構付き）。コクヨホームページ（http://kokuyo.co.jp/eco_ud/ud/products/scissors.html）より。

例えば小さいものでは、文房具。小さい力で切れるはさみ(写真1)や留めやすい押しピンなど、だれもが使いやすい製品が多く開発されています。また、缶ビールなども、最近では点字が刻印されているのにお気づきでしょうか。障害のある方のために「特別に」製品を作るのではなく、誰もが使えるように意識する、ということのポイントがあります。

城東区では、各戸にお配りしている広報誌ふれあい城東や、さまざまなお知らせに、SPコードを付けています。これは、このコードをスピーチオなどの読み取り装置にかけると、機械音声で内容を読み上げる、というもので、視覚障害のある方にとっては点字でなくとも、情報を入手できることとなります。

また、大きいものでは、施設そのものがユニバーサルデザインを取り入れている場合があります。学院近くの今福鶴見のダイヤモンドシティがそうです。

ここは、設計段階から多くの障害者団体の意見を聴取し、共に設計・建設を進めてきて、昨年オープンしました。特にトイレは、キーポイントになっています。障害と一口にいっても、肢体不自由、視覚障害、内部障害など様々で、高齢者、赤ちゃん連れの方など、ちょっとした配慮の必要な方はたくさんいます。いろんなニーズに応えられるように工夫が凝らしてありますので、ぜひ見学いただき、その意味を考えていただくと面白いと思います。

このように、「ユニバーサル」という考え方が広まる一方、技術の進歩が逆に作用する場合があります。この10数年で、駅の券売機や銀行のキャッシュ機はタッチパネル式に変わりましたが、これが視覚障害者には使いにくいのです。郵便局にあるような、ボタン式の方が断然良いのに、あつというまにタッチパネル式が主流となってしまいました。

こうしたことは、すべて意識の問題が大きいと思います。「結局この問題だ」といわれるのはそのことによります。「共に生きよう」という意識のあるなしが、工夫をするかしないか、の分岐点になります。今でも、家の近くに障害者の施設が建つ、という反対運動がおきます。重度障害者の雇用も遅々として進みません。だれもが不安なこと、面倒なことは嫌なのでしょう。「社会の成熟」というのは、どこまで他者を受け入れられるのかがその物差しになるのではないのでしょうか。



※写真はイメージです。

写真3 ユニバーサルデザインのトイレ。ダイヤモンドシティホームページ（<http://leafa.diamondcity.co.jp/guide/design.html>）より。



写真2 SPコード。城東区広報チラシより。

(大阪市城東区健康福祉センター)